東女医大誌　第59巻　第12号
頁 1364～1369 平成元年12月

調査報告

# 胆石症における術後愁訴の検討

東京女子医科大学付属第二病院外科
中島　久元・大谷　洋一・大東　誠司・細川　俊彦
大石　俊典・熊沢　健一・菊池　友允・芳賀　駿介
小川　健治・梶原　哲郎

（受付　平成元年8月1日）

## Complaints after Cholecystectomy

**Hisamoto NAKAJIMA, Yoichi OTANI, Seiji OHIGASHI, Toshihiko HOSOKAWA, Toshinori OISHI, Kenichi KUMAZAWA, Tomomitsu KIKUCHI, Shunsuke HAGA, Kenji OGAWA and Tetsuro KAJIWARA**
Department of Surgery, Tokyo Women's Medical College Daini Hospital

Two hundred and seventy eight operative cases of cholelithiasis (215 of cholecystolithiasis and 63 of choledocholithiasis) were subjected to a questionnaire survey of postoperative complaints after cholecystectomy.

Preoperative complaints such as abdominal pain, fever, icterus, and back pain were completely disappeared with the removal of cholecystic or choledocholic stones. In 15 cases of asymptomatic cholelithiasis, no tendency particularly to increase postoperative complaints was observed. No significant difference in postoperative conditions was shown between the two diseases, and 97% of the subjects could recover their former daily activities. Moreover, 85.2% of the subjects had good opinions of the operation that they underwent. It was so remarkable in patients with cholecystolithiasis that almost of them were fully satisfied with the surgical outcomes even though the half of them answered that they had postoperative complaints.

Thus the favorable response to surgical outcome, healthy recovery of their daily activities, and high disappearence rate of characteristic symptoms of cholelithiasis might allow us to think that surgical treatment virtually resulted in satisfactory outcomes.

### はじめに

胆石症に対する手術療法は手技が確立しており，安全に施行できること，短期間で治療可能であること，さらには発癌予防などの理由から，一般に広く行われている[1]．一方では，いわゆる胆摘後症候群にみられる術後愁訴の面から，手術療法に対する消極的意見もみられる[2]．更に最近ではquality of lifeからみた術後経過が注目されるようになっており，ただ胆石症の原因を取り除くだけではなく，患者が術後どのような生活を送り，どの程度の満足感を得ているかということが重要な問題となってきている．そこで，胆石症手術患者の術後愁訴の実態を明らかにする目的で予後調査を行い，若干の知見を得たので報告する．

### 対象および調査方法

昭和56年から昭和60年までの5年間に，当科で手術を施行した胆嚢結石症および総胆管結石症は316例である．このうち，術後に他病死した症例や

他臓器の合併切除を受けた38症例を除いた278例を対象とした．その内訳は，胆嚢結石症215例，総胆管結石症63例であり，術式はそれぞれ胆嚢摘出術，胆嚢摘出術兼総胆管切石術を施行した．術後愁訴は，文書によるアンケート方式を用いて調査を行った．アンケートの回収率は胆嚢結石215例中155例（72.1%），総胆管結石63例中48例（76.2%）であり，全体で278例中203例，73.0%であった（表1）．なお，対象症例の性別は，男性107例，女性

**表1**　対象症例およびアンケートの回収率

| | |
|---|---|
| 胆嚢結石 | 155／215（72.1　） |
| 総胆管結石 | 48／63　（76.2　） |
| 計 | 203／278（73.0%） |

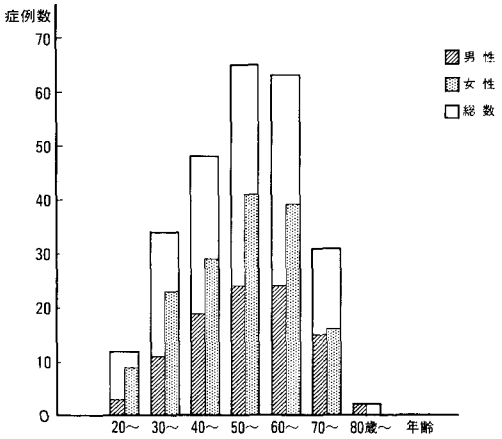


**図1**　性別と年齢分布

**表2**　アンケート用紙

胆石症アンケート用紙

1．以下の項目に記入して下さい．
氏名，年齢　　歳
現　住　所
電話番号
入院期間　昭和　年　月　日～昭和　年　月　日
手術した日　昭和　年　月　日
体　　重　手術前　kg，　現在　kg，

2．手術前にはどんな症状がありましたか？　○をつけて下さい．
a．症状なし，
b．腹痛　c．38℃以上の発熱　d．黄疸　e．背部痛
f．下痢しやすい　g．便秘　h．疲れやすい
i．吐気，呕吐　j．体重減少　k．食欲がない
l．その他の症状（　　）

3．手術後に具合の悪い症状がありますか？　○をつけて下さい．
a．症状なし
b．腹痛　c．38℃以上の発熱　d．黄疸　e．背部痛
f．下痢しやすい　g．便秘　h．疲れやすい
i．吐気，呕吐　j．体重減少　k．食欲がない
l．その他の症状（　　）

4．腹痛有りの場合，部位に○をつけて下さい．
手術前：a．上腹部～右上腹部　b．全体
c．その他（　　）
手術後：a．上腹部～右上腹部　b．全体
c．その他（　　）

5．手術後の症状が強いため医者にかかったことがありますか？
1）a．あり　b．なし
2）a．ありの場合，以下に記入してください．
その時の症状：
その時の診断名：
いつごろですか：
入院の有無：

6．手術後に，食べ物の好みが変りましたか．
（たとえば，油物が食べられなくなったようなことがあれば書いて下さい．）

7．手術後の状態について，○をつけて下さい．
a．具合が良い
b．あまり良くないが，仕事をしている．
c．仕事ができないほど，具合が悪い．

8．手術の効果について，○をつけて下さい．
a．手術をして良かった．
b．手術をしない方が良かった．
c．どちらともいえない．

9．手術をしない方が良かったとした場合，その理由を書いて下さい．

171例であり，年齢分布についてみると，50歳代が最も多く65例23%を占めている（図1）．アンケートは，手術前の症状，手術後の症状，症状の程度，食物嗜好の変化，術後の状態，自覚的手術効果などについて調査を行った（表2）．

## アンケート調査の結果

### 1. 術後愁訴の発生頻度

術後愁訴は軽微なものも含めるとアンケートの回答が寄せられた203例中99例（48.8%）にみられた．この有愁訴例を胆石の部位別にみると，胆嚢結石では155例中81例（52.3%）であり，総胆管結石では48例中18例（37.5%）と胆嚢結石に多かった．この有愁訴例のうち入院治療を要したのものは，胆嚢結石では81例中4例，4.9%であったのに対して，総胆管結石では18例中4例，22.2%と，総胆管結石での頻度が高かった（表3）．

### 2. 術前・術後の愁訴の内容（図2）

術前の症状と術後愁訴を比較検討した．胆石特有の症状と考えられる腹痛，発熱，黄疸，および背部痛についてみると，術前にはそれぞれ68.5%，13.3%，12.3%，42.9%に認められたが，術後にはそれぞれ11.3%，0.1%，0.1%，8.4%と著明に減少した．さらに胆石に付随した症状と考えられる嘔気，嘔吐，体重減少，および食欲不振についてみると，術前にそれぞれ35.0%，15.3%，14.8%であったところが，術後には4.9%，5.4%，3.0%と著明な減少が認められた．下痢，便秘，易疲労感は，術前にそれぞれ21.7%，29.6%，9.4%であったが，術後には17.2%，28.6%，9.9%とほとんど変化がみられなかった．

術前無症状であったいわゆる無症状胆石症は15例であるが，そのうち2例に術後愁訴として易疲労感を認めた．

表3　術後有愁訴症例

| | 有愁訴症例 | 要入院症例 |
|---|---|---|
| 胆嚢結石 | 81/155 (52.3) | 4/81 ( 4.9) |
| 総胆管結石 | 18/ 48 (37.5) | 4/18 (22.2) |
| 計 | 99/203 (48.8) | 8/99 ( 8.1) |

(%)

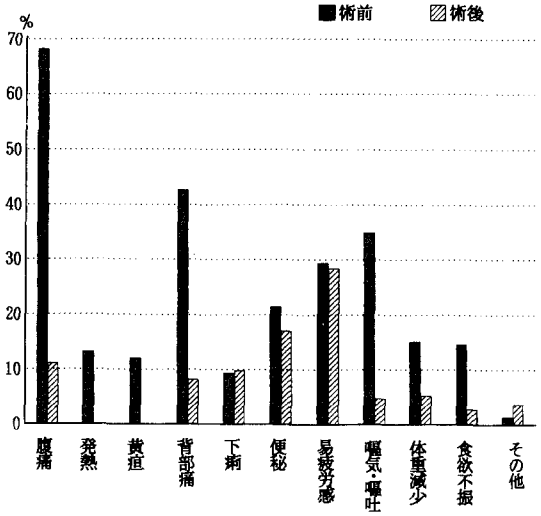


図2　術前および術後の愁訴

### 3. 結石の部位と愁訴の内容

結石の部位別に術前，術後の愁訴の内容をみると，胆嚢結石ではそれぞれ術前，腹痛67.1%，発熱9.0%，黄疸8.4%，背部痛45.2%であったものが術後11.0%，0.6%，0.0%，9.7%と大幅に減少した．総胆管結石でも術前，腹痛72.9%，発熱27.1%，黄疸45.8%，背部痛35.4%であったものが術後それぞれ12.5%，2.1%，2.1%，4.2%と大幅に減少した．それ以外の愁訴をみると胆嚢結石ではほとんど変化しなかったのに対して，総胆管結石では下痢，便泌，易疲労感などの愁訴が術前に比して減少した（図3）．

腹痛，発熱，黄疸，背部痛の胆石特有症状の消失率は，胆嚢結石で91.9%，総胆管結石95.3%，全体では92.7%であった（表4）．

### 4. 食物嗜好の変化

食物嗜好の変化に関しては，油物が食べられなくなった（5.9%），油物を控えている（4.9%）などの回答が得られたが，その多くは下痢，嘔気，便秘等の愁訴も同時に訴えていた．その他，肉類摂取の低下（1.0%）や，アルコール摂取量の低下（0.5%）などの訴えも少数にみられた．

### 5. 術後の状態（表5）

術後の状態を a.具合が良い，b.あまり良くないが仕事をしている，c.仕事ができないほど具合が悪い，の3段階に分けた．具合が良いという回

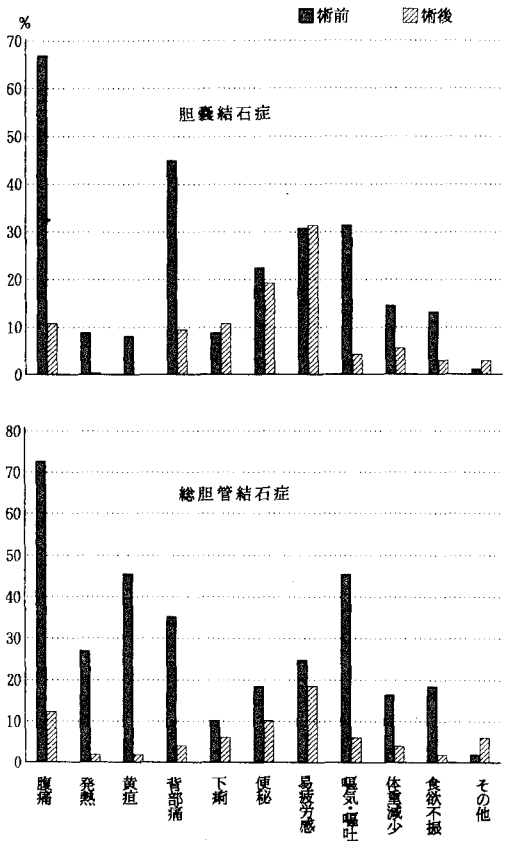


図3　結石部位と術前・術後の愁訴

表4　胆石症状消失率

| | |
|---|---|
| 胆嚢結石 | 124／135（91.9） |
| 総胆管結石 | 41／43（95.3） |
| 計 | 165／178（92.7） |

（%）

答は79.3%であり，あまり良くないが仕事をしているとした人は17.7%，仕事ができないほど具合が悪いとした人は2例（1.0%）であった．この2例はいずれも胆嚢結石例であり，追跡調査の結果，1例は慢性肝炎で加療中であった．他の1例は胆道系精査にても異常を認めず，他の器質的疾患は見つからずその理由は不明であった．

**6．手術の効果**（表6）

手術の効果に対する患者側からの意見を調査した．a．手術をして良かった，b．手術をしないほうが良かった，c．どちらとも言えない，の3段階に分けて回答を得た．手術をして良かったと回答した人は85.2%，手術をしないほうが良かったと答えた人は1.0%，どちらとも言えないと答えた人は12.8%であった．手術をしないほうが良かったとした患者は，術後の状態で「仕事ができないほど具合が悪い」と回答した2症例である．この2例については術前みられた不定愁訴が術後も残っていた．

表5　術後の状態

| | 胆嚢結石 | 総胆管結石 | 計 |
|---|---|---|---|
| a | 77.4% | 85.4% | 79.3% |
| b | 19.4 | 12.5 | 17.7 |
| c | 1.0 | 0 | 1.0 |
| 無回答 | 2.2 | 2.1 | 2.0 |

a．具合が良い
b．あまり良くないが仕事をしている
c．仕事ができないほど具合が悪い

表6　手術の効果

| | 胆嚢結石 | 総胆管結石 | 計 |
|---|---|---|---|
| a | 84.5% | 87.5% | 85.2% |
| b | 1.3 | 0 | 1.0 |
| c | 13.5 | 10.4 | 12.8 |
| 無回答 | 0.7 | 2.1 | 1.0 |

a．手術をして良かった
b．手術をしないほうが良かった
c．どちらとも言えない

## 考　察

胆石症に対する治療として外科的治療が広く行われているが，その手術適応に関して問題となるのは，胆石症手術後に種々の愁訴が出現することである．強い症状を呈して器質的病変を伴うものから保存的治療で改善をみる軽微なものまで多種多様であり，一般的には胆摘後症候群あるいは胆道手術後症候群などと呼ばれている[3]．今回われわれは当科における胆石症手術症例の術後愁訴についてアンケート調査を行った．アンケート様式は宮崎らの方法[4]に従った．術後の愁訴について，われわれは症状の軽微なものも含めて48.8%，約半数に術後愁訴を認めた．関口ら[5]は胆石症術後の67%に何らかの愁訴を認めており，亀田ら[3]も，

44.9%に術後愁訴を認めたとしている．一方，大野ら[6]は，術後患者の自主的な受診の際のカルテ記載事項をもとに術後愁訴を捨いあげるという方法で検討をしているが，33%にしか術後愁訴を認めておらず，アンケート調査による報告に比して低い発生率となっている．これはアンケートによる調査では胆道手術に関連しない愁訴が術後愁訴として含まれてくる可能性を示唆しており，この点を念頭におく必要があるものと考えられる．

術前の症状と術後愁訴の内容を検討すると胆石特有の症状と考えられる腹痛，発熱，黄疸，背部痛は術後大幅に減少していた．嘔気，嘔吐，体重減少，食欲不振も明らかに低下しており，これらは胆石に付随する症状が手術により改善したことを示すものと考えられる．また，無症状胆石症であった症例15例についてみると，その内の2例に術後の易疲労感を認めただけで，無症状胆石症において特に術後愁訴が多いというわけではなかった．これは宮崎の報告[4]に一致している．一方，代田[7]の報告によると，胆石症手術後の具合の良くない症例では，術後愁訴は上腹部痛が60～70%で最も多いとされている．われわれのアンケートで「仕事ができないほど具合が悪い」と答えた2症例も上術腹部痛を訴えていた．しかし，諸検査を行ったところ，結石の遺残や再発などの所見は得られなかった．

結石の部位別に術前後の愁訴の内容をみると，腹痛，発熱，黄疸，背部痛などは胆嚢結石，総胆管結石ともに，著明に減少した．それ以外の愁訴をみると胆嚢結石ではあまり変化がみられなかったのに対して，総胆管結石ではほとんどの愁訴が術前に比して減少していた．胆嚢結石では，下痢，便秘，易疲労感などが術後新たに生じたため上記の結果となったものと考えられる．

食物嗜好の変化に対する回答では，12.3%で嗜好の変化を訴え，油物の摂取を控えているものが10.8%にみられた．この嗜好の変化を訴えた症例では，ほとんど下痢，嘔気等の愁訴を訴えており，このような愁訴が食物嗜好変化の一因になったものと考えられる．

術後の状態では，胆嚢結石，総胆管結石に差はなく，97%が社会復帰していた．胆嚢結石では，愁訴が多いにもかかわらず，社会復帰状況は良好であった．代田[7]は71.4%に具合が良い，23.1%に軽度の症状を有するが仕事をしているとの結果を得ており，94.5%が社会復帰可能であったと報告している．穴沢[8]も85.5%が社会復帰可能であったとしており，我々の結果と一致している．ただ，諸家の報告[7)9]では総胆管結石症の方が胆嚢結石より術後状態不良の比率が高いとされているにもかかわらず，われわれの症例では仕事のできないほど具合の悪い総胆管結石症例は1例も認めなかった．

手術の効果に対する患者側の意見をみると，全体の85.2%が手術をして良かったとしており，胆嚢結石，総胆管結石に差はなかった．特に胆嚢結石では，約半数が術後愁訴ありとしたにもかかわらず，手術の効果に対してはほとんどが満足している．このことは術後愁訴の程度が比較的軽度であったことを示唆しているものと考えられる．

以上，手術の効果に対する回答や社会復帰状況，胆石特有の症状の消失率からみて，胆石症の手術療法はほぼ満足すべき成績をおさめているものと考えられた．

## おわりに

今回我々は，胆石症手術後愁訴につきアンケート調査を行い，その結果に基づいて検討し報告した．

## 文　献


1) **松代　隆，長嶋英幸，洞口　篤ほか**：胆石症の外科的治療．外科 Mook, No. 2, 胆石症へのアプローチ，pp148-159（1978）

2) **MacSherry CK, Ferstenberg H, Calhoun WF et al**: The natural history of diagnosed gallstone disease in symptomatic and asymptomatic patients. Ann Surg 202：59-63, 1985

3) **亀田治男**：胆道手術後症候群．臨床成人病　2：693-696，1972

4) **宮崎逸夫**：胆石術後愁訴の問題点．外科治療 25：159-169，1971

5) **関口定義，赤坂嘉宣，井上和彦ほか**：胆嚢剔除後遺症の病態と外科治療に関する検討．日消外会誌 8：498-503，1975

6) **大野孝則，篠崎文信，御園生正紀ほか**：内科から

みた胆摘後愁訴．胆と膵　4：153-159，1983
7）**代田明郎**：胆石症の手術後遠隔成績．内科シリーズ No. 17，胆石症のすべて，pp381-393，南光堂，東京（1974）
8）**穴沢雄作**：手術適応の選択．内科シリーズ No. 17，胆石症のすべて，pp343-351，南光堂，東京（1974）
9）**志村秀彦，山本　博**：術後愁訴の原因と予防対策について．消化器外科　3：181-189，1980